

年間第 15 主日 (ルカ 10:25-37)

その順番を、一つ下げることができますか



「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」 (10・36-37)

追い剥ぎに襲われ、半殺しの目に遭っている人のそばを、三通りの人が通りました。祭司とレビ人とサマリア人です。半殺しの目に遭った人はエルサレムからエリコに下っていたわけですから、反対に三人は、エルサレムに上っていたことになります。「エルサレムに上る」ということは、それぞれが、宗教上の大切な務めを果たしに向かっているということですから、途中で寄り道したりしている暇はありません。

実際、祭司とレビ人はその人を見ると、道の向こう側を通っていきましました。エルサレムで宗教上の大切な務めがあるわけですから、道端に倒れている人にかまっている暇はないのです。これは原理原則通りです。しかし、旅をしていたあるサマリア人は同じことをしませんでした。彼も、礼拝の務めを果たすために先を急いでいたはずですが。しかし彼は、いったん自分の最優先事項を横に置きました。

これから、私の中学生の時の体験を紹介したいと思います。今から45年も前の話です。すでに話を聞いたことがある人も、どうかもう一度耳を傾けてください。

当時私はすでに小神学生した。夏休みの終わり、8月31日、上五島から神学校に帰る日のことです。前の日に私は荷物を準備し、明日いつものように神学校に帰る予定でした。ところが前の晩、8月30日の夜中に、弟がひどい熱を出して、病院に運ばれていきました。

心配した母もいっしょに病院に行きました。その時母は、「自分で何とかして帰りなさい」と言い残して病院に行ったのです。けれども困ったことに私は母親からお金を1円も預かっていなかったのです。自宅からは、井持浦から福江に行くくらいの距離がありました。それなのにバス代も、船賃もありませんでした。

悪いことは続きます。バス停に行ってみると、もうバスは出発していました。港行きのバスは船の時間に合わせて一日三便しかありませんでした。ほかに港に行く方法も思い付きませんでした。

悲しくなって、バス停にしゃがんでみると、知らないおじさんが声をかけてきました。「あんた、輝明さん家の神学生やろ」「はい」「神学校に今日帰っとね?」「はい。けれども、行けなくなりました。」私は前の日からのことを話して、もうバスもないし、帰ることが出来なくなると話しました。泣きたい気持ちでした。

すると、そのおじさんはポケットからお金を出して、私に握らせてくれました。見ると一万円でした。45年前の一万円です。おじさんは私に、「その公衆電話でタクシーばつかまえてすぐ港に行かんね」と言

ってくれました。

私はお礼を言わなければいけないので、「おじさん、名前を教えてください」と言いました。するとそのおじさんは、「おじさんはおじさんたい。子どもは心配せんでよか。はよう行け」と言って、いなくなってしまったのです。

今でも、そのおじさんの名前は分かりません。元気なのかどうかも分かりません。けれども、そのおじさんは小神学生の私、海の物とも山の物とも知れぬ私に大金をくださったのです。45年前の一万円、何か使い道があったでしょうに、道端で倒れかかっていたような私のために譲ってくださいました。

そのおじさんは、信仰のことをとやかく言いませんでした。けれどもおじさんは、イエスの教えを完全に実行したと思っています。誰にでも優先事項があるはずなのに、その優先順を一つ下げて、目の前で半死半生にあったような私に手を差し伸べてくれたのです。

そのおじさんのことを、私は決して忘れません。おじさんは、本当に私がイエスの弟子になって、イエスに固く結ばれる手伝いをしてくれたのです。おじさんは、私の心の中に、説教の冒頭に触れたイエスの声を届けてくれたのです。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

大金を持たせてくれたおじさんに、私は返すものが何もありませんでした。私が司祭を目指している。それだけで、使おうとしていた予定を譲って私にくださいました。このおじさんに私は司祭になって何としても恩返しをしなければ。子どもながらにそう感じました。

45年前のあの時のように、イエスは今でも私たちに声をかけて、「行って、あなたも同じようにしなさい」と言っていると思います。父や母を愛することは当然のことです。親が、息子や娘を愛することも当然のことです。それでも、神のことを優先する人がいます。神の招きを大切にできる人は、今までいちばん大事だと思っていたものでも、順番を一つ下げるのです。そしてそれは今でも続いているのです。

福江教会の助任司祭になられた青田神父様。社会人として立ち位置があった人でした。そうそうたるキャリアを積んできました。能力もあり、社会で成功できる人でした。それを、神のために順番を一つ下げて、神の招きを最優先にして司祭となられたのです。そして今回は、大司教様の要望を受け入れて、すでに二度、主任司祭を務めていたのを助任神父様になってくださっています。イエス様のために何度も、優先順位を一つ下げてくださっているのです。

私たちも同じことを問われています。イエスが期待に照らしてみても、自分の生活の優先順位を変えること。いざとなったら、今までは最重要だったものでも順番を一つ下げる。それは痛みを伴うかも知れませんが、私たちが信仰の証しをするとき、圧倒的な証しになると思います。

この世のものの価値を、永遠のものの価値と置き換えることはできない。この一言を、イエスへの返事として今週は生活に戻っていきましょう。その答えがあれば、生活すべてに、神の心にかなう順番を付けることができるようになるはずです。

年間第16主日(ルカ 10:38-42)